

長すぎた春が落とす暗い影 ——過去の交際期間の長さが配偶者としての魅力に及ぼす影響——

Why did you break up after a long relationship? The effect of prolonged past relationships on romantic desirability

天野陽一・若尾良徳

問題

恋愛や結婚といった配偶関係は排他的で長期間続くものであるため、そのパートナーとしてどのような相手を選ぶのかは非常に重要な問題である。配偶者に求める特性として異性に何を求めるのかについては、とくにその性差について性的戦略理論の予測にもとづいて多くの研究が行われてきた (*for a review, see Buss & Schmitt, 2019*)。性的戦略理論によれば、繁殖に関わる淘汰圧が男女で異なっていることから配偶者に求める特性には性差が生じると予測することができる。これまでに多くの研究で、男性が繁殖能力を判断する手がかりとなる若さ・美しさ・健康さといった特性を重視するのに対して、女性が資源提供能力を判断する手がかりとなる経済力・社会的地位・野心・勤勉さといった特性を重視することが示されている (e.g., Bech-Sørensen & Pollet, 2016; Buss & Schmitt, 1993; Sprecher et al., 1994; Walter et al., 2020)。一方、これらの特性はあくまでも配偶者に求める資質の必要条件であり、平均的な水準を超えていれば意思決定における重要度は小さくなること、必要条件を満たした候補者の中から選ぶ際には男女とも親切さといった性格面をより重視することも指摘されている (Li et al., 2002, 2013; Townsend & Wasserman, 1998)。性的戦略理論は性差の予測に注目されることが多いが、配偶者に求める特性としてもっとも重視するのは性別にかかわらず親切さをはじめとするポジティブなパーソナリティ特性であるということも主張している (Buss & Schmitt, 1993)。ヒトの男女は子育てという長期にわたる困難な共同事業を成し遂げるためにパートナーとの間にペア・ボンディングという緊密な関係を形成する。このような協力関係を安定したものとし長期間継続するにはコミットメントとポジティブなパーソナリティ特性が必要不可欠である。長期配偶では関係を長く続けることが重要となるため、配偶者に求める資質として愛情や親切さが重視されると考えられる。

社会的情報を利用した配偶者選択

近年の配偶者選択の研究では、配偶者に求める資質として何がどのような理由で重視されているのかという問いから、配偶者としての資質を評価するためにどのような手がかりが利用されているのかという問いに関心の焦点が移ってきている。短期配偶において求められる資質が視覚的な手がかり (i.e., 身体的魅力) から容易に評価することができるのに対し、長期配偶において求められる資質を視覚的な手がかりにもとづいて評価することは難しい (Hill & Buss, 2008; Little et al., 2008; Vakirtzis & Roberts, 2009, 2010; Waynforth, 2007)。このような外見から判断することが難しい配偶者としての資質を推測するための戦略として、同性による配偶者選択の情報を利用する *mate-choice copying* と呼ばれる戦略が知られている (Dugatkin, 1992, 1996; Gibson & Höglund, 1992; Pruett-Jones, 1992; Westneat et al., 2000)。*Mate-choice copying* とは、あるメスから配偶者として選択されたオスが、それを目撃した別のメスからも配偶者として好まれるようになる現象である。この現象は魚類や鳥類の配偶行動において見出され研究が行われてきたが、ヒトの配偶行動においても重要な要素となっていることが指摘されている (Dugatkin, 2000)。ヒトにおける *mate-choice copying* の研究では、おもに女性から男性に対する評価を対象として、男性の現在または過去のパートナーの有無に関する情報が女性から受ける異性としての魅力の評価に影響することが示されている (e.g., Anderson & Surbey, 2014; Bressan & Stranieri, 2008; Deng & Zheng, 2015; Eva & Wood, 2006; Hill & Buss, 2008; Stanik et al., 2010)。同性が時間と労力をかけて吟味し自らの配偶者として選んだ相手は、配偶者として望ましい資質を持っているであろうと推測することができる。

Mate-choice copying は潜在的配偶者がこれまでにパートナーを得たことがあるかどうかといういわば交際経験の有無に関する情報を利用する戦略であるが、ヒトにおいては交際経験の有無だけでは配偶者として

の資質を評価するには情報量が足りないことも指摘されている (Vakirtzis & Roberts, 2009)。ヒトの配偶システムは繁殖パートナーが入れ替わる連続単婚であり、多くの人が生涯のうち少なくとも一人以上のパートナーを得る機会を持つことが一般的である (Buss, 1985; Buss & Schmitt, 1993; Fisher, 1989)。生涯を通じて一度でもパートナーが得られるかという点においては個人差があまり見られないため、ある時点までに交際経験があるかないかというだけでは配偶者としての望ましさを判断することは難しい (Little et al., 2008, 2011; Uller & Johansson, 2003; Vakirtzis & Roberts, 2009, 2010)。実際、ヒトにおける mate-choice copying の研究では、パートナーの有無に関する情報だけでは配偶魅力への影響が見られないという否定的な結果が多く報告されている (e.g., Milonoff et al., 2007; Uller & Johansson, 2003)。

こうした流れの中で、近年では mate-choice copying は交際経験の有無の情報にもとづく評価という位置づけに留まらず、潜在的配偶者の配偶行動に関する社会的情報の利用というより広い文脈の中で検討されるようになってきている。たとえば、配偶行動の量的側面に注目した研究として、交際経験人数による配偶魅力への影響について調べた研究がある (e.g., Anderson & Surbey, 2014; Stewart-Williams et al., 2017)。連続単婚の配偶システムを持つヒトにおいては、これまでにパートナーを得たことがあるかどうか、すなわち交際経験があるかどうかということよりも、どのくらいの交際経験があるかということの方が資質の手がかりとして有用であると考えられる。交際経験人数と配偶者としての望ましさの評価の関連を調べた研究では、交際経験がない場合よりも交際経験がある場合の方がポジティブであり、さらに1人だけと交際した経験がある場合よりも複数の交際経験がある場合の方がよりポジティブに評価されることが報告されている (Stewart-Williams et al., 2017)。このような複数の交際経験があった方が望ましいとする傾向は、日本の若者を対象とした恋愛経験に関する意識調査にもあらわれている (若尾・天野, 2008)。大学生に20歳時点での理想の交際経験人数を尋ねたところ、約7割が2人または3人と回答しており、それ以上の人数を答えた者も含めると、複数の交際経験があることを理想とする回答は約9割に上った。また、同年代の交際経験人数の平均を推測させたところ、実際の平均よりも過大に推測しており、交際経験が多いことが望ましいという意識を反映していると考えられる結果であった。

過去の配偶関係の質に関する情報

潜在的配偶者の配偶行動に関する社会的情報としては、以前に持っていた関係の質に関する情報も重要である。たとえば、男性が以前に持っていた関係がどのように解消されたのかについての情報が、その男性に対する女性からの配偶者としての望ましさの評価に影響することが報告されている (Scammell & Anderson, 2020; Stanik et al., 2010)。これらの研究では、パートナーから別れを切り出されたという男性は、女性参加者から配偶者としての望ましさを低く評価されていた。女性の方から別れを切り出したということは、女性に別れを決意させるような何らかの望ましくない特性を男性が持っていたことを示唆する。Mate-choice copying の先行研究では、配偶者選択を模倣される個体は十分なコストをかけて潜在的配偶者を吟味し、配偶者選択を成功裏に終えたことが仮定されている (Place et al., 2010; Vakirtzis, 2011; Vakirtzis & Roberts, 2009)。しかし、配偶者選択は困難な適応課題である。長期配偶の資質の評価はエラーを犯しやすいものであるため (Ryan et al., 2007)、同性の配偶者選択を無条件で信頼することはできない (Giraldeau et al., 2002; Nordell & Valone, 1998)。現実世界でも、実際に関係を持ってはじめて相手が望ましくない性質を持っていたことが明らかになったということは珍しくない。女性の方から関係を解消したということは、男性に事前にはわからない欠点があったということであり、配偶者選択が失敗であったことを示唆する。

女性の方から関係を解消したということがネガティブな手がかりになる一方で、以前の関係が長続きしたということはポジティブな手がかりになると考えられる。女性がパートナーとして選んだ男性の元を去らずに関係を持ち続けたということは、彼女が行った配偶者選択が間違っていなかったことを意味する (Danchin et al., 2004)。長期的な関係のパートナーとして望ましい資質を持っていることを示すもっとも正直なシグナルは、過去に実際に長期的な関係を持っていたという実績に他ならないであろう。我々は異性の友人に対しては相手の過去の交際期間の長さなど気にならないが、好意を抱いている異性であれば以前の恋人との関係がどのくらい続いていたのかが気になってしまうものである (天野・若尾, 2016)。異性の魅力を評価する際には相手の過去の交際期間の長さの情報が影響し、交際期間が長かった場合の方が短かった場合よりも長期配偶のパートナーとしての望ましさを高く評価する傾向が見られる (Amano & Wakao, 2022)。交際期

間が長いことはそれだけ長期間のテストに耐えてきたことの証であり、長期配偶のパートナーとして相応しい資質を持っていることの信頼できる手がかりになると考えられる。

長続した関係の否定的な影響

交際期間が長いことはポジティブな評価に結びつくが、長ければ長いほどよいというわけではないと考えられる。交際期間の長さには許容できる上限・下限の長さがあり、集団内で共有されていることが報告されている(天野・若尾, 2009)。交際期間が長いことでポジティブに評価されることを示した Amano & Wakao (2022) では、交際期間が長い条件の値として3年を使用していた。この値は同じ母集団を対象に行った予備調査における「もっとも長くてもどのくらいが限度か」という上限に関する質問に対する回答の平均値 - 1SD をもとに設定されたものである。同じ予備調査において平均推測の回答として得られた1年よりは長い、多くの参加者にとっての上限の回答は超えず、適度に長いが決して極端に長すぎはしないと考えられるような値として注意深く選ばれたものであった。Amano & Wakao (2022) ではこのような適度に長い交際期間を持つことが配偶者としてポジティブに評価されることが示されているが、許容できる上限を超えるような非常に長い交際期間の場合にはネガティブに評価される可能性がある。

このような逆U字型の関係は交際経験人数による配偶魅力への影響を調べた先行研究においてはすでに報告されている。交際経験人数が増えることによる配偶者としての望ましさの上昇は2~3人がピークであり、それ以上に多くなると評価は下がっていくことが示されている(Stewart-Williams et al., 2017)。交際経験人数は2~3人がもっとも望ましいというのは、理想の交際経験人数とも一致している(若尾・天野, 2008)。男女ともに交際経験は適度に多いことが望ましく、交際経験が多すぎる場合には交際経験がない場合よりもかえってネガティブに評価されてしまうのである。交際経験が非常に多いとネガティブに評価されるのは、それが乱婚や不貞の手がかりとなっており、長期配偶において重要なコミットメントとは相容れないと受け取られるためと考えられる(Anderson & Surbey, 2014)。また、これまでに多くの異性から選ばれたということは配偶者としての質の高さを示すが、ライバルが多いために獲得するのが難しいことも意味する(Hill & Buss, 2008)。Mate-choice copying の先行研究で

は、相手にパートナーがいるかどうかが自分のパートナーとすることができそうな相手であるかの判断に影響し、パートナーとしての利用可能性が低い場合には望ましさの評価におけるポジティブな影響が抑えられることが示唆されている(Anderson & Surbey, 2014; O'Hagen et al., 2003; Uller & Johansson, 2003; Vakirtzis & Roberts, 2012; Yorzinski & Platt, 2010)。同性ライバルの存在やパートナーとしての利用可能性の低さが社会的情報を利用した判断に影響していると考えられる。

交際期間の長さはコミットメントの手がかりとなるが、その一方で同性ライバルの存在やパートナーとしての利用可能性の低さを示す手がかりにもなるため、程度によっては配偶者としての望ましさの評価にネガティブな影響を及ぼすと考えられる。交際期間が長かったということは、元パートナーとの関係が緊密であったことを示唆する。元パートナーとの関係が安定していて非常に長く続いたものであった場合、元パートナーとのつながりが残っている可能性も高くなるであろう。男性と元パートナーとのつながりは、男性の関心を引けず十分な投資が得られないリスクや場合によっては一人で子育てを負うリスクにつながる。女性は男性の関心を奪う他の女性の存在に対して非常にネガティブに反応する(Brase et al., 2004; Buss et al., 1996, 1992, 1999; Buunk et al., 1996; Sagarin et al., 2012; Whitty & Quigley, 2008; Wiederman & Kendall, 1999)。とりわけ男性の元パートナーは不貞の大きな脅威として女性に認識される(Cann & Baucom, 2004)。コミットメントが重視される長期配偶では、他の女性とのつながりが残っている可能性が高い男性は配偶者としての望ましさの評価が低くなると予想できる。

自分自身の配偶状況による影響

他の女性とのつながりを懸念することで男性の配偶者としての望ましさの評価を抑える傾向は、パートナーがいる女性においてよりもパートナーがいない女性において顕著であると考えられる。女性自身のパートナーの有無が mate-choice copying に及ぼす影響について検討した先行研究では、パートナーがいる女性においてはパートナーがいる男性の方がパートナーがいない男性よりも望ましいと評価されていたが、パートナーがいない女性においてはパートナーがいる男性とパートナーがいない男性に対する評価に差が見られなかった(Bressan & Stranieri, 2008)。パートナーがいる男性は、他の女性からパートナーとして選ばれたという事実によって配偶者としての資質の評価が高くなる

が、他の女性のパートナーであるという事実によって自らの新しいパートナーとしては利用可能性が低いと判断される。パートナーとしての利用可能性が低いという点は、すでにパートナーがいるため新しいパートナーを得ることの重要度が低い女性にとっては問題にならないが、パートナーがおらずこれから新しいパートナーを得ようとしている女性にとっては mate-choice copying の効果を相殺するに十分な問題点となるであろう。交際期間が長いことによって男性と元パートナーのつながりが懸念され、そのことが男性の配偶者としての望ましさの評価に影響するのであれば、その影響はパートナーがおらず配偶者獲得の動機づけが高い女性においてより強いと予想することができる。

本研究の概要

本研究では、交際期間の長さの情報が配偶魅力の評価に影響するという先行研究の知見を受け、男性の過去の交際期間が非常に長かったという情報が女性による配偶者としての望ましさの評価にどのような影響を及ぼすのかを検討する。先行研究では交際期間が長いことで配偶者としての望ましさを高く評価されることが示されているが、その一方で交際期間の長さには許容範囲が存在することが報告されていることから、許容される限度を超えるような非常に長い交際期間を持つ男性はネガティブに評価される可能性がある。過去の交際期間の長さの情報は配偶者としての資質の手がかりであると同時に自分のパートナーとして利用可能であるかの判断にも影響していると考えられることから、参加者自身の恋人の有無によって過去の交際期間が非常に長かったという情報による配偶魅力の評価への影響が異なっているのかについても検討する。

方法

実験参加者

看護系専門学校の女子学生 55 名を対象に質問紙実験を行った。この専門学校では社会人入試を行っているため、実験参加者の大半は 18～19 歳であったが、年齢の範囲は 18～42 歳と広く、30 歳以上の参加者の中には結婚している者や結婚経験がある者が多く含まれていた。異性に対する評価は年齢や婚姻歴によって大きく影響を受けるため、本研究では男性刺激人物の年齢を考慮して 30 歳未満の 40 名を分析対象とした。分析対象者の平均年齢は 19.13 歳 ($SD = 2.49$) であった。年齢の内訳は、18～19 歳が 35 名、20～24 歳が 3 名、25～29 歳が 2 名であった。恋人がいる者は 9

名、恋人がいない者は 21 名、無回答が 10 名であった。異性との交際経験がある者は 27 名、交際経験がない者は 2 名、無回答が 11 名であった。

実験計画

交際期間 (適度に長い: 3 年 vs. 非常に長い: 5 年) × 参加者の恋人有無 (恋人あり vs. 恋人なし)。いずれも参加者間要因であった。交際期間の各水準の値は先行研究および予備調査をもとに設定した。適度に長い条件については、Amano & Wakao (2022) において交際期間が長い条件の値として用いられていた「3 年」をそのまま用いた。非常に長い条件については、本実験の約 2 ヶ月前に行った交際期間の長さに関する意識調査の結果をもとに設定した。意識調査には「恋人とつきあいはじめてから別れるまでの期間はもっとも長くてどのくらいが限度だと思いますか」という上限に対する意識を尋ねる質問項目が含まれており、その回答の集計結果を用いた。分布の偏りを補正するため対数変換した上で平均値を求め、指数変換を施して元の単位に戻したところ、交際期間の上限に対する意識として平均 58.10 ヶ月 ($SD = 2.05$) を得た。この結果をもとに交際期間が非常に長い条件の値を「5 年」とした。

実験手続き

講義時間の一部を利用して集団状況で質問紙実験を行った。研究への協力は講義の成績とは無関係であり、参加するかどうかは自由に決定でき、いつでも途中で離脱できることを説明した。また、回答したくない項目があった場合は回答する必要はなく、研究に参加したくない場合は白紙のまま提出するよう求めた。異性愛に関する項目を含むことを説明し、プライベート内容を含むため、他人と相談したり、他人の回答を見たりしないよう指示した。

質問紙の最初のページに男性刺激人物のプロフィールが掲載されていた (Appendix 参照)。このプロフィールを読み、その印象をもとに次ページ以降の質問に回答するよう実験参加者に求めた。プロフィールには過去の恋愛経験に関する記述が含まれており、直前の恋人と交際していた期間の長さについての記述内容を変えることで独立変数の操作をした。

質問紙の次ページ以降で、プロフィールにあったようなタイプの男性に対して自分はどのような印象を抱くか、このようなタイプの男性は一般的に女性からどのような評価を受けるとするかを尋ねた。それぞれの観点から、好感度、友人としての魅力、恋人としての

魅力（長期配偶魅力）、一夜限りの相手としての魅力（短期配偶魅力）について、いずれも7件法で評定を求めた。好感度については、「あなたは、このようなタイプの男性にどの程度好感が持てますか？」という質問に対して「1：まったく好感が持てない」～「7：非常に好感が持てる」で回答を求めた。友人としての魅力、恋人としての魅力、一夜限りの相手としての魅力については、「あなたは、このようなタイプの男性に友人として（or 恋人として or 一夜限りの相手として）どの程度魅力を感じますか？」という質問に対して「1：まったく魅力的ではない」～「7：非常に魅力的である」で回答を求めた。他の女性からの評価の推測では「あなたは～ますか？」の部分で「多くの女性にとって～と思いますか？」と表記を変えて同様に尋ねた。

最後に異性交際に関する意識や参加者自身の交際経験の有無や恋人の有無といった異性交際の状況について尋ねた。

全員の回答が終わっていることを壇上から確認した後、質問紙を伏せた状態で回収用のテーブルに参加者自身で提出してもらった。回答の有無にかかわらず、講義に出席していた学生全員から質問紙を回収した。

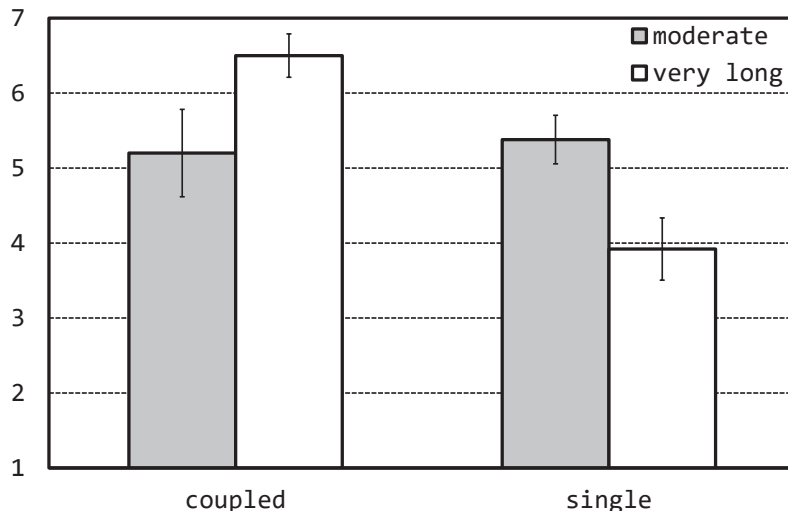
結果

自分の評価

恋人としての魅力

恋人有無の主効果 ($F(1, 26) = 5.67, p < .05, \eta^2 = .14$) および交際期間と恋人有無の交互作用効果 ($F(1, 26) = 7.44, p < .05, \eta^2 = .19$) が有意であった (Figure 1)。男性の交際期間が非常に長い場合、恋人がいない参加者 ($M = 3.92, SD = 1.50$) は、恋人がいる参加者 ($M = 6.50, SD = .58$) に比べて、男性の恋人としての魅力をより低く評価していた ($t(26) = 3.61, p < .01, d = 2.06$)。男性の交際期間が適度に長い場合は、参加者の恋人の有無による評価の差は見られなかった (恋人なし群 $M = 5.38, SD = .92$; 恋人あり群 $M = 5.20, SD = 1.30$; $t(26) = -.25, ns.$)。恋人がいない参加者は、交際期間が非常に長い男性に対して、交際期間が適度に長い男性に対してよりも、恋人としての魅力をより低く評価していた ($t(26) = 2.59, p < .05, d = 1.16$)。恋人がいる参加者では、男性の交際期間の長さによる評価の差は見られなかった ($t(26) = -1.55, ns.$)。恋人がいない参加者が交際期間が非常に長い男性に対して恋人としての魅力を低く評価するという結果であった。

Figure 1 Attractiveness as a long-term partner as a function of duration of previous relationship and participants' relationship status

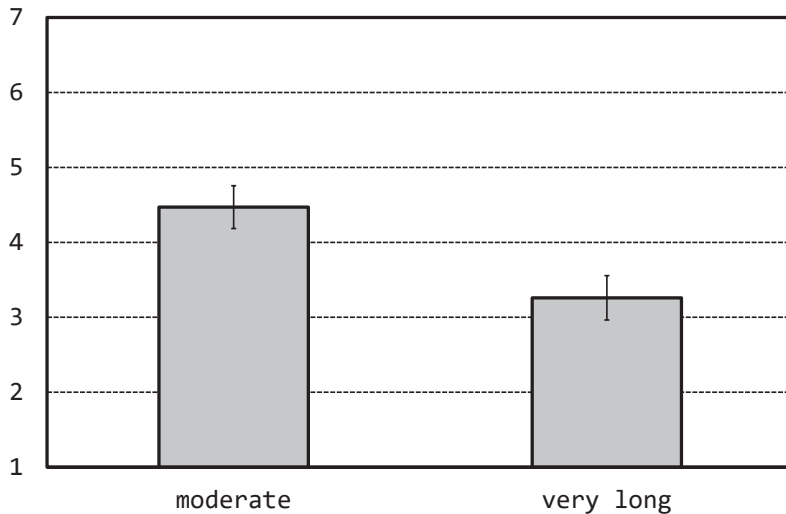


一夜限りの相手としての魅力

交際期間の主効果が有意であった ($F(1, 26) = 6.18, p < .05, \eta^2 = .19$; Figure 2)。交際期間が非常に長い男性 ($M = 3.26, SD = 1.42$) は、交際期間が適度に長い男性 ($M = 4.47, SD = 1.18$) に比べて、一夜限りの相手と

しての魅力をより低く評価されていた。参加者の恋人有無を含む効果はいずれも有意にならなかった ($F_s < .14, ns.$)。自分に恋人がいるかいないかに関わらず、交際期間が非常に長い男性に対しては一夜限りの相手としての魅力を低く評価するという結果であった。

Figure 2 Attractiveness as a short-term partner as a function of duration of previous relationship



友人としての魅力

有意な効果は見られなかった ($F_s < 2.41, ns.$)。

好感度

交際期間と恋人有無の交互作用効果が有意であった ($F(1, 26) = 5.13, p < .05, \eta^2 = .15$)。男性の交際期間が非常に長い場合、恋人がいない参加者 ($M = 4.69, SD = 1.32$) は、恋人がいる参加者 ($M = 6.50, SD = .58$) に比べて、男性に対する好感度をより低く評価していた ($t(26) = 2.74, p < .05, d = 1.57$)。男性の交際期間が適度に長い場合は、参加者の恋人の有無による評価の差は見られなかった (恋人なし群 $M = 5.50, SD = .76$; 恋人あり群 $M = 5.20, SD = 1.48$; $t(26) = -.46, ns.$)。恋人がいない参加者においても、恋人がいる参加者においても、男性に対する好感度の評価に交際期間の長さによる違いは見られなかった ($t_s < 1.68, ns.$)。交際期間が非常に長い男性に対する好感度は、自分に恋人がいるかどうかによって左右されるという結果であった。全体のパターンは恋人としての魅力の評価と一致していた。

女性一般の評価の推測

恋人としての魅力

交際期間と恋人有無の交互作用効果が有意であった ($F(1, 26) = 4.80, p < .05, \eta^2 = .15$; Figure 3)。男性の交際期間が適度に長い場合、恋人がいない参加者 ($M = 5.75, SD = 1.04$) は、恋人がいる参加者 ($M = 4.60, SD$

$= .55$) に比べて、多くの女性は男性の恋人としての魅力を高く評価するだろうと推測していた ($t(26) = -2.09, p < .05, d = 1.19$)。男性の交際期間が非常に長い場合は、参加者の恋人の有無による評価の推測の差は見られなかった (恋人なし群 $M = 4.69, SD = .86$; 恋人あり群 $M = 5.25, SD = 1.50$; $t(26) = 1.01, ns.$)。恋人がいない参加者は、交際期間が適度に長い男性の方が、交際期間が非常に長い男性よりも、多くの女性から恋人としての魅力を高く評価されるだろうと推測していた ($t(26) = 2.44, p < .05, d = 1.10$)。恋人がいる参加者では、男性の交際期間の長さによる評価の推測の差は見られなかった ($t(26) = -1.00, ns.$)。自分に恋人がいない場合、交際期間が適度に長い男性は恋人としての魅力を高く評価されるだろうと推測するという結果であった。

一夜限りの相手としての魅力

交際期間の主効果が有意であった ($F(1, 26) = 10.02, p < .01, \eta^2 = .27$; Figure 4)。交際期間が非常に長い男性 ($M = 3.65, SD = 1.15$) は、交際期間が適度に長い男性 ($M = 4.94, SD = .97$) に比べて、多くの女性から一夜限りの相手としての魅力を低く評価されるだろうと推測していた。参加者の恋人有無を含む効果はいずれも有意にならなかった ($F_s < .42, ns.$)。自分に恋人がいるかいないかに関わらず、交際期間が非常に長い男性は一夜限りの相手としての魅力を低く評価されるだろうと推測するという結果であった。

Figure 3 Inference of attractiveness ratings by others as a long-term partner as a function of duration of previous relationship and participants' relationship status

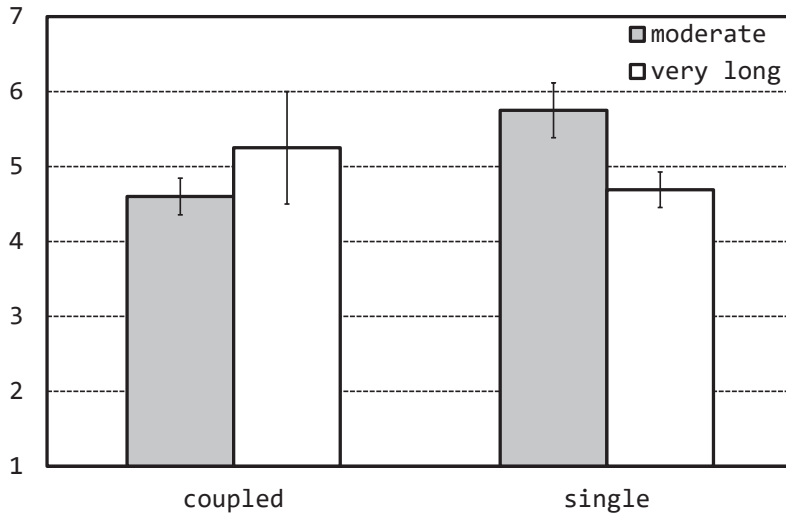
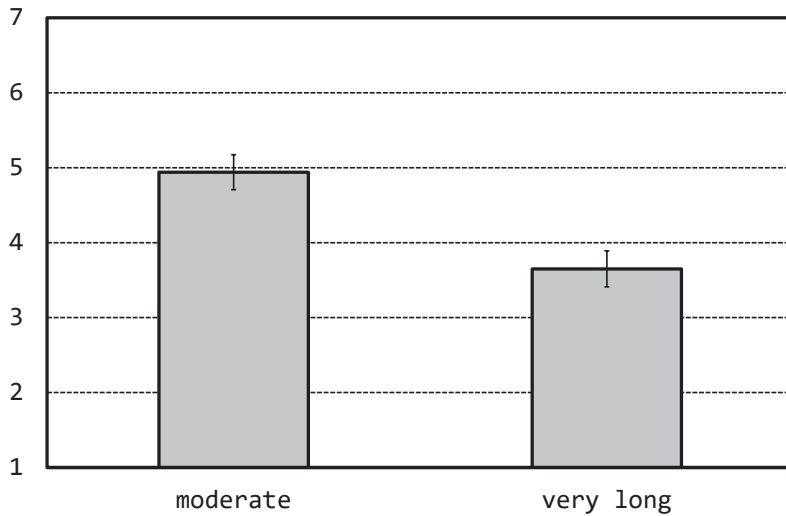


Figure 4 Inference of attractiveness ratings by others as a short-term partner as a function of duration of previous relationship



友人としての魅力

交際期間と恋人有無の交互作用効果が有意であった ($F(1, 26) = 5.89, p < .05, \eta^2 = .18$)。男性の交際期間が非常に長い場合、恋人がいる参加者 ($M = 6.25, SD = .96$) は、恋人がいない参加者 ($M = 5.31, SD = .63$) に比べて、男性は多くの女性から友人としての魅力をより高く評価されるだろうと推測していた ($t(26) = 2.28, p < .05, d = 1.30$)。男性の交際期間が適度に長い

場合は、参加者の恋人の有無による評価の推測の差は見られなかった (恋人なし群 $M = 5.88, SD = .84$; 恋人あり群 $M = 5.40, SD = .55; t(26) = -1.15, ns$)。恋人がいる参加者は、交際期間が非常に長い男性の方が、交際期間が適度に長い男性よりも、多くの女性から友人としての魅力を高く評価されるだろうと推測する傾向が見られた ($t(26) = -1.75, p < .10, d = 1.18$)。一方、恋人がいない参加者は、交際期間が適度に長い男性の方

が、交際期間が非常に長い男性よりも、多くの女性から友人としての魅力を高く評価されるだろうと推測する傾向が見られた ($t(26) = 1.75, p < .10, d = .79$)。交際期間が非常に長い男性に対して、自分に恋人がいる場合は友人としての魅力を高く評価されるだろうと推測し、自分に恋人がいない場合は友人としての魅力を低く評価されるだろうと推測するという結果であった。

好感度

有意な効果は見られなかった ($F_s < 1.66, ns.$)。

考察

本研究では、交際期間の長さの情報が配偶者としての魅力の評価にポジティブに影響するという知見 (Amano & Wakao, 2022) と交際期間の長さには許容範囲が存在するという知見 (天野・若尾, 2009) の両方を受け、交際期間が許容範囲の上限を超えるほど長い場合にはどのような影響が見られるのかについて検討した。

交際期間が非常に長い男性は、交際期間が適度に長い男性にくらべて、女性から受ける好意や異性としての魅力の評価が低くなっていた。長期配偶魅力である恋人としての魅力の評価については、参加者自身の恋人有無による差が見られた。恋人がいない女性は交際期間が非常に長い男性の恋人としての魅力を低く評価していたが、恋人がいる女性では男性の交際期間の長さによる評価の違いは見られなかった。短期配偶魅力である一夜限りの相手としての魅力については、参加者自身の恋人有無にかかわらず、交際期間が非常に長い男性に対して低く評価していた。好感度については長期配偶魅力のパターンと一致する結果が得られたが、友人としての魅力の評価については交際期間の長さによる違いは見られなかった。長期配偶においても短期配偶においても交際期間が許容される限度を超えるほど長い場合にはネガティブに評価されることが示唆された。

本研究では自分がどのように評価するかに加えて、一般的に女性からどのように評価されると思うかという推測についても尋ねた。長期配偶魅力である恋人としての魅力については、恋人がいない女性は交際期間が適度に長い男性は魅力を高く評価されるだろうと推測していた。恋人がいる女性の推測には交際期間の長さによる違いは見られなかった。短期配偶魅力である一夜限りの相手としての魅力については、参加者自身の恋人有無にかかわらず、交際期間が非常に長い男性

は魅力を低く評価されるだろうと推測していた。友人としての魅力については、参加者自身の恋人有無によって推測のパターンが異なっていた。恋人がいない参加者は交際期間が非常に長い男性の方が魅力を低く評価されると推測していたのに対し、恋人がいる参加者は交際期間が非常に長い男性の方がむしろ魅力を高く評価されると推測していた。交際期間が長いことはポジティブであるが、上限を超えるほど長すぎる場合にはネガティブに評価されるであろうと認識していることが示唆された。

自分が評価する場合のパターンと女性一般からの評価を推測した場合のパターンを比較すると、細かい部分での違いはあるものの、両者でおおよそ同じ傾向が見られた。長期配偶や短期配偶における魅力に関しては、自分の評価と周囲の評価の推測は一致していた。友人としての魅力に関しては、自分の評価では有意な効果がみられず、周囲の評価の推測においてのみ有意な効果が見られた。しかしながら、自分の評価における結果のパターンは周囲の評価の推測におけるそれと一致しており、サンプルサイズの問題により検出力が弱かった可能性が考えられる。全体として、周囲の女性も自分と同じように男性の過去の交際期間の長さの情報に影響を受けるだろうと推測しているという結果であった。

長期配偶における魅力への影響

交際期間が非常に長い男性は、交際期間が適度に長い男性にくらべて、女性から長期配偶のパートナーとして望ましくないと評価された。交際期間の長さが配偶魅力に及ぼす影響を検討した先行研究では、交際期間が長い男性は長期配偶のパートナーとしてポジティブに評価されることが示されていた (Amano & Wakao, 2022)。その一方で、交際期間の長さには許容される範囲が存在し、上限を超えるような過度な長さはネガティブな影響を及ぼす可能性があることが示唆されていた (天野・若尾, 2009)。本研究では、予備調査の「恋人とつきあいはじめてから別れるまでの期間はもっとも長くてもどのくらいが限度だと思いますか」という質問への回答をもとに、交際期間が非常に長い条件の値を「5年」と設定した。刺激人物が20歳の大学生であり、本研究の分析対象者も20歳以下が大多数であったことを考慮すると、ひとつの関係の継続期間の長さとしては十分に長いものであったと考えられる。本研究の結果から、交際期間は長ければ長いほどよいわけではなく、適切な範囲から逸脱すると

むしろネガティブな評価に結びつくことが示唆された。

交際期間の長さがある範囲を超えると配偶者としての望ましさの評価にネガティブな影響が見られるようになるのはなぜであろうか。ひとつの可能性として、元パートナーとのつながりが残っていることを懸念することが考えられる (Anderson & Surbey, 2022)。関係が相当な期間にわたって長続きしたということは、関係を解消したとしても元パートナーとの間に強いつながりが残っている可能性は高くなる。女性は男性の元パートナーを繁殖のライバルとして認知し、関係に対する大きな脅威として受け取る傾向がある (Cann & Baucom, 2004)。男性の関心が元パートナーに向いてしまえば自分や子どもに十分な投資が見込めなくなってしまう (Buss, 1994; Buss et al., 1992)。男性の関心を引きつけることができず、短期配偶の関係に甘んじるようになってしまったり、周囲から浮気相手とみなされて悪評が立ってしまったりする可能性がある。また、男性の関心を自分に向けることができたとしても、そのことにより元パートナーからの嫉妬の対象となってしまうかもしれない。他の女性とのつながりが懸念される男性は、たとえパートナーとして望ましい資質を持っていたとしても、実際にパートナーとして追い求めるには相応しくない相手となるであろう。

交際期間の長さによるネガティブな影響が元パートナーとのつながりの脅威によるものであるならば、関係を解消してからの期間が長く空いていればその影響は緩和されるかもしれない (天野・若尾, 2016)。関係を解消してから次の関係を持つまでの空白期間の長さは貞節の手がかりであり、元パートナーとのつながりによる脅威を判断するために利用されることが示唆されている (Amano & Wakao, 2022)。本研究では空白期間の長さを先行研究の長い条件にあたる11ヵ月に固定していたが、交際期間が非常に長い場合に懸念される元パートナーとのつながりの脅威を相殺するには十分な長さではなかった可能性がある。交際期間が長くなれば、空白期間もそれだけ長くとする必要があるのかもしれない。交際期間の情報と空白期間の情報はそれぞれ単独でも有用であるが、両者が組み合わせることで潜在的配偶者の資質や配偶戦略の信頼できる手がかりになると考えられる。今後は交際期間と空白期間の両方を操作して、どのような組み合わせが手がかりとして利用されるのかを明らかにすることが必要である。

交際期間が長くなり過ぎると配偶者としての望ましさが低くなる別の理由として、配偶行動の経験が少な

いため配偶者として成熟していないとみなされている可能性も挙げられる。配偶行動の量的側面の影響について取り上げた先行研究では、交際経験はある程度多い方が望ましく、交際経験人数が2~3人程度の場合にもっともポジティブに評価されることが示されている (Stewart-Williams et al., 2017)。長期配偶においては、ひとつの関係が長く続けば続くほど、それだけ別の相手との関係を作る機会が少なくなる。さまざまな関係を経験する機会が得られなければ、配偶者としての振る舞うべきかを学習する機会も制限されるであろう。オスが過去の配偶関係の経験によって配偶者としての望ましい振る舞いを獲得しているだろうという期待がメスの mate-choice copying に影響している可能性が指摘されている (Anderson & Surbey, 2014; Dugatkin, 1992)。ひとつの関係の期間が極端に長いことは、元パートナーという特定の相手との関係の良さを示唆する一方で、さまざまな相手との関係を通じた配偶者としての経験が不足していることの証拠にもなるのかもしれない。配偶者探索の研究においては、青年期は配偶者選択の準備期間であり、試しの恋愛を通して自らの配偶価値とそれにもとづく配偶者選択基準を学習するモデルが提案されている (Miller & Todd, 1998; Penke et al., 2008; Todd & Miller, 1999)。成人期以降の本番に向けて多くの経験を積んでおくために、青年期の関係はある程度の長さに留めることが求められている可能性が考えられる。

恋人の有無によるパターンの違い

長期配偶魅力である恋人としての魅力の評価では、参加者自身の恋人有無によるパターンの違いが見られた。恋人がいない女性では交際期間が非常に長い男性に対する評価が低かったが、恋人がいる女性では男性の交際期間の長さによる評価の差は見られなかった。本研究の結果は、パートナーがいる男性とパートナーがいない男性に対する評価が参加者女性の恋人有無によって異なることを示した先行研究と同じように、パートナーとしての利用可能性の評価の観点から説明することができる。Bressan & Stranieri (2008) は、恋人がいる女性では男性のパートナー有無によって評価に差が見られるが、恋人がいない女性では男性のパートナー有無による評価の違いは見られないことを報告している。パートナーがいる男性はパートナーがいることで配偶者としての望ましさの評価が上がるが、同時にパートナーがいることで新しく関係を形成することは難しいため、自らのパートナーとしての利用可能

性は低いと評価されることになる。先行研究では恋人がいない女性においてパートナーとしての利用可能性の低さにより mate-choice copying の効果が相殺されたことで評価に差が見られなかったものと考えられる。本研究における交際期間が非常に長い男性も元パートナーとのつながりが懸念されることでパートナーとしての利用可能性が低いと評価された可能性がある (Anderson & Surbey, 2022)。恋人がいない女性が男性の元パートナーとの交際期間が非常に長かったことから自らのパートナーとしては利用可能性が低いと評価して恋人としての魅力の評価を割り引いたと考えれば、先行研究と本研究の結果を整合的に説明することができる。本研究において恋人がいない女性の方ではなく恋人がいる女性の方で評価に差が見られないという結果であったのは、交際期間の長さはある程度以上であれば長期配偶における資質の証明になるため、適度に長い場合でも非常に長い場合でも配偶者としての望ましさの評価に対してどちらも同じようにポジティブな影響を及ぼすためと考えられる。すなわち、恋人がいない女性が男性を実際にパートナーとして選ぶことを想定して評価を行ったのに対し、恋人がいる女性は男性をパートナーとする必要がないため、パートナーとしての利用可能性は考慮せずに交際期間の長さによる資質の評価のみを行ったということであろう。

短期配偶における魅力への影響

短期配偶魅力である一夜限りの相手としての魅力の評価においても、交際期間が非常に長いことはネガティブな影響を及ぼしていた。長期配偶とは異なり短期配偶ではコミットメントが重視されないことや恋人がいる女性においても影響が見られたことから、長期配偶と同じように男性のパートナーとしての利用可能性の評価の観点から説明することは難しいであろう。短期配偶においても長期配偶と同じ方向の結果が得られたことには別の説明が必要である。もっともあり得る説明としては、男性の元パートナーから嫉妬を向けられることへの懸念や他の女性と長期的な関係を持っていた男性を「寝とった」という悪評が立つことに対する恐れが影響している可能性が考えられる。すでにパートナーがいる男性を自らのパートナーとして追い求めることには社会的なコストがあり、そのことが mate-choice copying のポジティブな影響と競合することが指摘されている (Anderson & Surbey, 2014)。多くの女性は、パートナーのいる男性を魅力的であると評価したり、パートナーとして望ましいと評価したりす

ること自体が社会的に受容されない行為である可能性を認識している (Vakirtzis & Roberts, 2012)。交際期間が非常に長かった男性を好意的に評価することに対しても同様の理由から躊躇している可能性がある。もしそうであれば、長期配偶の結果と同じように、空白期間がもっと長ければネガティブな影響は緩和されるのかもしれない。

短期配偶においても長期配偶においてと同じ影響が見られたことに対する別の説明可能性として、短期配偶と長期配偶がひと続きの関係であると捉えられている可能性が挙げられる。女性が短期配偶の関係を持つ理由はさまざまあるが (for a review, see Greiling & Buss, 2000)、そのひとつに短期配偶の関係の中で長期配偶パートナーとしての資質を査定したり、短期配偶の関係を通して長期配偶パートナーを獲得したりすることがある (Buss & Schmitt, 1993)。Amano & Wakao (2022) では交際期間が長い男性は長期配偶魅力を高く評価されたが、空白期間が長いことで短期配偶戦略をとっていないことが示唆されている場合には交際期間が長い男性は短期配偶魅力も高く評価された。先行研究のこの結果は短期配偶の関わりが長期配偶パートナーを得るための手段となっていることを示唆するものであるといえる。本研究の結果も、短期配偶が長期配偶への足がかりとして捉えられており、短期配偶でも長期配偶と同じ評価基準が用いられたことによるものであると解釈することができる (Buss & Schmitt, 1993; Gangestad & Simpson, 2000)。長期配偶とは異なり恋人がいる女性においても交際期間の長さによる影響が見られたのは、恋人がいる女性は短期配偶をパートナーの乗り換え先の評価のために利用しているためと考えられる。短期配偶から長期配偶に移行する可能性があるのであれば、長期配偶と同様に交際期間が長すぎることでパートナーとしての利用可能性が低いことが問題となるであろう。

友人としての魅力への影響

交際期間の長さの情報は、配偶者選択とは一見無関連な友人としての魅力の評価にも影響を及ぼしていた。恋人がいない女性では長期配偶魅力におけるパートナーと一致しており、交際期間が非常に長い男性を恋人としてだけでなく友人としても低く評価していた。一方、長期配偶魅力において交際期間の長さによる影響が見られなかった恋人がいる女性では逆方向の影響が見られ、交際期間が非常に長い男性を友人として高く評価していた。

友人としての魅力の評価におけるこのような結果は、友人を選択する際にも将来的なパートナーとしての利用可能性を考慮している可能性を示唆するものである。友人関係から恋愛関係に発展することは広く一般的に見られることである (Bleske-Rechek & Buss, 2001; Guerrero & Mongeau, 2008)。恋人がいない女性は友人関係から恋愛関係への発展を意識して回答しており、交際期間の長さにもとづくパートナーとしての利用可能性の評価に回答が影響を受けた可能性がある。それに対して恋人がいる女性は、新しいパートナーを獲得する動機づけが弱いため、交際期間の長さから推測されるパーソナリティ特性の評価のみが回答に反映されていたと考えられる。長期配偶や短期配偶とはまた少し異なる形で自らの配偶状況に応じた情報の利用がされていたといえる。

もしくは、別の説明可能性として、自己と類似した相手を友人としてポジティブに評価する傾向によるものと解釈することもできる。恋人がいない女性にとっては交際期間が短いほど自分に近い立場であるため、交際期間がより長い男性を相対的にネガティブに評価したと考えられる。それに対して恋人がいる女性はパートナーがいる状態が長く続いていることに対してポジティブな評価をした可能性がある。交際期間の長さがどのようなメカニズムで友人としての魅力の評価に影響するのかについては、今後更なる検討が必要であろう。

本研究の限界

本研究では交際期間が非常に長いことが配偶魅力の評価にネガティブに影響することが示されたが、おもに方法論上の問題に関連したいくつかの限界がある。

第一に、そしてもっとも重要な点として、交際期間の長さとして設定した値の妥当性の問題がある。本研究では配偶魅力の評価に条件間での違いが見られたが、その差の程度はそれほど大きくなかった。その原因として、非常に長い条件の交際期間の長さがそれほど長いと認識されていなかった可能性が考えられる。本研究では交際期間が非常に長い条件の値として「5年」を用いた。刺激として呈示した男性は20歳の大学生であり、プロフィールには現在の恋人を含めて3人との交際経験があると記載されていた。20歳の時点で複数の交際経験があり、そのうちひとつの交際期間が5年間というのは、一般的にはかなり長いと考えられる。しかし、本研究の参加者にとってはそれほど長いと感じられるような長さではなかったのかもしれ

ない。5年という値は予備調査における「もっとも長くてもどのくらいが限度か」という上限に関する質問の集計結果をもとに設定したが、この質問が許容できる範囲の上限ではなく望ましい範囲の上限の意味になっていた可能性がある。また、本研究では上限に対する回答の平均値を用いたが、大半の参加者にとっての上限を超えた長さとするためには平均値ではなく平均値 + 1SD にするべきであった。しかしながら、上限 + 1SD を実際に計算すると約10年になるため、20歳時点での交際期間の長さとしては不自然である。刺激人物の年齢を30歳程度に設定し、交際期間が10年程度である場合の影響について再度検討する必要がある。

第二に、参加者の年齢のばらつきが大きく、プロフィールの男性とくらべて年齢が高い女性が含まれていた点が問題として指摘できる。本研究において分析対象となった参加者は大半が18~19歳であったが、20歳以上の者も少なからず含まれていた。プロフィールの男性は20歳の大学生であったため、20歳以上の女性にとっては年下の男性をパートナーとして評価することになっていた。そのため、一部の参加者にとっては刺激男性をパートナーとして評価すること自体がそもそも難しく、プロフィールの内容による評価の差が生じにくかった可能性が考えられる。交際期間が非常に長い条件を10年とするために刺激男性の年齢を30歳程度に設定するのとあわせて、実験参加者も同じ年齢帯である20代後半から30代前半の女性に限定することが必要であろう。

第三に、サンプルサイズが小さく、実験条件のセルごとの人数にも偏りがあったことが挙げられる。もともと参加者の数が多くなかった上に、参加者の年齢や婚姻歴が影響する可能性を排除するために分析対象を30歳未満に限定したため、サンプルサイズが小さくなってしまった。さらに、本研究では参加者の恋人有無による影響についても検討したが、一般に恋人がいる人の割合は全体の3割程度であるため、実験条件のセルごとの人数に偏りが生じてしまった。交際期間の長さや参加者の恋人有無の組み合わせによって男性の配偶魅力の評価が異なるという結果が得られたが、こうした問題から結果の解釈は慎重に行う必要があるだろう。

第四に、交際期間の長さとして取り上げた水準が少ないため、交際期間が非常に長いことによる影響が明確ではないことが挙げられる。本研究では、交際期間の長さとして適度に長い場合(3年)と非常に長い場合(5年)しか取り上げておらず、交際期間の長さが

平均的である場合や短い場合との比較を行っていない。そのため、交際期間が非常に長い場合には適度に長い場合に比べて配偶魅力の評価が低くなることは示されたが、交際期間が平均的である場合と同じ水準に戻っただけなのか、交際期間が短い場合と同じかそれ以上にネガティブに評価されているのかは明確ではない。配偶行動の量的側面を扱った先行研究では、交際経験人数が多すぎる場合には、交際経験がない場合よりもむしろネガティブに評価されることが示されている (Stewart-Williams et al., 2017)。交際経験人数と同じように、交際期間の長さに関しても、限度を超えるくらいに長い場合にはむしろ短いことよりもネガティブな評価になるかもしれない。先行研究で交際期間が短い条件で用いられていた「1ヵ月と1週間」のほか、予備調査で平均推測の回答として得られた「1年」や調査対象集団における現実の交際期間の長さの平均値である「6ヵ月」といった複数の水準を設定して検討する必要があるだろう。

本研究のまとめ

本研究では、交際期間が適度に長い場合と非常に長い場合とでは配偶者としての望ましさを評価に差が生じることを示し、交際期間は長ければ長いほどよいというわけではないことを明らかにした。交際期間の長さによる配偶者としての望ましさを評価への影響には参加者自身にパートナーがいるかどうかに関連しており、配偶者獲得への動機づけの程度によって情報の利用のされ方が異なっている可能性が示唆された。交際期間が長いことは配偶者としての望ましい資質を持っていることの手がかりとなるが、パートナーがおらず配偶者獲得への動機づけが高い場合には元パートナーとのつながりが懸念されることで評価が抑えられると考えられる結果であった。潜在的配偶者および自分自身の配偶状況によって交際期間の長さの情報が異なる利用のされ方をしている可能性について、今後詳しく検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 天野陽一・若尾良徳. (2009). 大学生女子における交際周期の実態と意識. *思春期学*, 27(4), 342-350.
- 天野陽一・若尾良徳. (2016). 過去の交際期間・空白期間に対する関心：相手に抱く好意と恋愛重要度による影響. *浜松学院大学研究論集*, 12, 27-36.
- Amano, Y., & Wakao, Y. (2022). Women's sensitivity to

- men's past relationships: Reliable information use for mate-choice copying in humans. *Evolutionary Psychological Science*, 8(2), 107-119. <https://doi.org/10.1007/s40806-021-00295-9>
- Anderson, R. C., & Surbey, M. K. (2014). I want what she's having: Evidence of human mate copying. *Human Nature*, 25(3), 342-358. <https://doi.org/10.1007/s12110-014-9202-7>
- Anderson, R. C., & Surbey, M. K. (2022). Call me daddy: How long-term desirability is influenced by intention for fatherhood. *Evolutionary Psychological Science*, 8(3), 343-350. <https://doi.org/10.1007/s40806-022-00324-1>
- Bech-Sørensen, J., & Pollet, T. V. (2016). Sex differences in mate preferences: A replication study, 20 years later. *Evolutionary Psychological Science*, 2(3), 171-176. <https://doi.org/10.1007/s40806-016-0048-6>
- Bleske-Rechek, A. L., & Buss, D. M. (2001). Opposite-sex friendship: Sex differences and similarities in initiation, selection, and dissolution. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27(10), 1310-1323. <https://doi.org/10.1177/01461672012710007>
- Brase, G. L., Caprar, D. V., & Voracek, M. (2004). Sex differences in responses to relationship threats in England and Romania. *Journal of Social and Personal Relationships*, 21(6), 763-778. <https://doi.org/10.1177/026540750404047836>
- Bressan, P., & Stranieri, D. (2008). The best men are (not always) already taken: Female preference for single versus attached males depends on conception risk. *Psychological Science*, 19(2), 145-151. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.2008.02060.x>
- Buss, D. M. (1985). Human mate selection: Opposites are sometimes said to attract, but in fact we are likely to marry someone who is similar to us in almost every variable. *American Scientist*, 73(1), 47-51. <http://www.jstor.org/stable/27853061>
- Buss, D. M. (1994). *The evolution of desire: Strategies of human mating* (Vol. 183). Basic Books.
- Buss, D. M., Larsen, R. J., & Westen, D. (1996). Sex differences in jealousy: Not gone, not forgotten, and not explained by alternative hypotheses. *Psychological Science*, 7(6), 373-375. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.1996.tb00392.x>

- Buss, D. M., Larsen, R. J., Westen, D., & Semmelroth, J. (1992). Sex differences in jealousy: Evolution, physiology, and psychology. *Psychological Science*, 3(4), 251-256. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.1992.tb00038.x>
- Buss, D. M., & Schmitt, D. P. (1993). Sexual strategies theory: An evolutionary perspective on human mating. *Psychological Review*, 100(2), 204-232. <https://doi.org/10.1037//0033-295X.100.2.204>
- Buss, D. M., & Schmitt, D. P. (2019). Mate preferences and their behavioral manifestations. *Annual Review of Psychology*, 70, 77-110. <https://doi.org/10.1146/annurev-psych-010418-103408>
- Buss, D. M., Shackelford, T. K., Kirkpatrick, L. A., Choe, J. C., Lim, H. K., Hasegawa, M., Hasegawa, T., & Bennett, K. (1999). Jealousy and the nature of beliefs about infidelity: Tests of competing hypotheses about sex differences in the United States, Korea, and Japan. *Personal Relationships*, 6(1), 125-150. <https://doi.org/10.1111/j.1475-6811.1999.tb00215.x>
- Buunk, B. P., Angleitner, A., Oubaid, V., & Buss, D. M. (1996). Sex differences in jealousy in evolutionary and cultural perspective: Tests from the Netherlands, Germany, and the United States. *Psychological Science*, 7(6), 359-363. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.1996.tb00389.x>
- Cann, A., & Baucom, T. R. (2004). Former partners and new rivals as threats to a relationship: Infidelity type, gender, and commitment as factors related to distress and forgiveness. *Personal Relationships*, 11(3), 305-318. <https://doi.org/10.1111/j.1475-6811.2004.00084.x>
- Danchin, E., Giraldeau, L.-A., Valone, T. J., & Wagner, R. H. (2004). Public information: From nosy neighbors to cultural evolution. *Science*, 305(5683), 487-491. <https://doi.org/10.1126/science.1098254>
- Deng, Y., & Zheng, Y. (2015). Mate-choice copying in single and coupled women: The influence of mate acceptance and mate rejection decisions of other women. *Evolutionary Psychology*, 13(1), 89-105. <https://doi.org/10.1177/147470491501300106>
- Dugatkin, L. A. (1992). Sexual selection and imitation: Females copy the mate choice of others. *The American Naturalist*, 139(6), 1384-1389. <https://doi.org/10.1086/285392>
- Dugatkin, L. A. (1996). Copying and mate choice. In C. M. Heyes & B. G. Galef Jr. (Eds.), *Social learning in animals: The roots of culture* (pp. 85-105). Academic Press. <https://doi.org/10.1016/B978-012273965-1/50006-6>
- Dugatkin, L. A. (2000). *The imitation factor: Evolution beyond the gene*. Free Press.
- Eva, K. W., & Wood, T. J. (2006). Are all the taken men good? An indirect examination of mate-choice copying in humans. *Canadian Medical Association Journal*, 175(12), 1573-1574. <https://doi.org/10.1503/cmaj.061367>
- Fisher, H. E. (1989). Evolution of human serial pairbonding. *American Journal of Physical Anthropology*, 78(3), 331-354. <https://doi.org/10.1002/ajpa.1330780303>
- Gangestad, S. W., & Simpson, J. A. (2000). The evolution of human mating: Trade-offs and strategic pluralism. *Behavioral and Brain Sciences*, 23(4), 573-587. <https://doi.org/10.1017/s0140525x0000337x>
- Gibson, R. M., & Höglund, J. (1992). Copying and sexual selection. *Trends in Ecology and Evolution*, 7(7), 229-232. [https://doi.org/10.1016/0169-5347\(92\)90050-L](https://doi.org/10.1016/0169-5347(92)90050-L)
- Giraldeau, L.-A., Valone, T. J., & Templeton, J. J. (2002). Potential disadvantages of using socially acquired information. *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences*, 357(1427), 1559-1566. <https://doi.org/10.1098/rstb.2002.1065>
- Greiling, H., & Buss, D. M. (2000). Women's sexual strategies: The hidden dimension of extra-pair mating. *Personality and Individual Differences*, 28(5), 929-963. [https://doi.org/10.1016/S0191-8869\(99\)00151-8](https://doi.org/10.1016/S0191-8869(99)00151-8)
- Guerrero, L. K., & Mongeau, P. A. (2008). On becoming "more than friends": The transition from friendship to romantic relationship. In S. Sprecher, A. Wenzel, & J. Harvey (Eds.), *Handbook of relationship initiation* (pp. 175-194). Psychology Press.
- Hill, S. E., & Buss, D. M. (2008). The mere presence of opposite-sex others on judgments of sexual and romantic desirability: Opposite effects for men

- and women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34(5), 635-647.
<https://doi.org/10.1177/0146167207313728>
- Li, N. P., Bailey, J. M., Kenrick, D. T., & Linsenmeier, J. A. W. (2002). The necessities and luxuries of mate preferences: Testing the tradeoffs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82(6), 947-955. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.82.6.947>
- Li, N. P., Yong, J. C., Tov, W., Sng, O., Fletcher, G. J. O., Valentine, K. A., Jiang, Y. F., & Balliet, D. (2013). Mate preferences do predict attraction and choices in the early stages of mate selection. *Journal of Personality and Social Psychology*, 105(5), 757-776. <https://doi.org/10.1037/a0033777>
- Little, A. C., Burriss, R. P., Jones, B. C., DeBruine, L. M., & Caldwell, C. A. (2008). Social influence in human face preference: Men and women are influenced more for long-term than short-term attractiveness decisions. *Evolution and Human Behavior*, 29(2), 140-146. <https://doi.org/10.1016/j.evolhumbehav.2007.11.007>
- Little, A. C., Jones, B. C., DeBruine, L. M., & Caldwell, C. A. (2011). Social learning and human mate preferences: A potential mechanism for generating and maintaining between-population diversity in attraction. *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences*, 366(1563), 366-375. <https://doi.org/10.1098/rstb.2010.0192>
- Miller, G. F., & Todd, P. M. (1998). Mate choice turns cognitive. *Trends in Cognitive Sciences*, 2(5), 190-198. [https://doi.org/10.1016/S1364-6613\(98\)01169-3](https://doi.org/10.1016/S1364-6613(98)01169-3)
- Milonoff, M., Nummi, P., Nummi, O., & Pienmunne, E. (2007). Male friends, not female company, make a man more attractive. *Annales Zoologici Fennici*, 44(5), 348-354.
- Nordell, S. E., & Valone, T. J. (1998). Mate choice copying as public information. *Ecology Letters*, 1(2), 74-76.
<https://doi.org/10.1046/j.1461-0248.1998.00025.x>
- O'Hagen, S., Johnson, A., Lardi, G., & Keenan, J. P. (2003). The effect of relationship status on perceived attractiveness. *Social Behavior and Personality*, 31(3), 291-300.
<https://doi.org/10.2224/sbp.2003.31.3.291>
- Penke, L., Todd, P. M., Lenton, A. P., & Fasolo, B. (2008). How self-assessments can guide human mating decisions. In G. Geher & G. Miller (Eds.), *Mating intelligence: Sex, relationships, and the mind's reproductive system* (pp. 37-75). Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Place, S. S., Todd, P. M., Penke, L., & Asendorpf, J. B. (2010). Humans show mate copying after observing real mate choices. *Evolution and Human Behavior*, 31(5), 320-325. <https://doi.org/10.1016/j.evolhumbehav.2010.02.001>
- Pruett-Jones, S. (1992). Independent versus nonindependent mate choice: Do females copy each other? *The American Naturalist*, 140(6), 1000-1009. <https://doi.org/10.1086/285452>
- Ryan, M. J., Akre, K. L., & Kirkpatrick, M. (2007). Mate choice. *Current Biology*, 17(9), R313-R316.
<https://doi.org/10.1016/j.cub.2007.02.002>
- Sagarin, B. J., Martin, A. L., Coutinho, S. A., Edlund, J. E., Patel, L., Skowronski, J. J., & Zengel, B. (2012). Sex differences in jealousy: A meta-analytic examination. *Evolution and Human Behavior*, 33(6), 595-614. <https://doi.org/10.1016/j.evolhumbehav.2012.02.006>
- Scammell, E., & Anderson, R. C. (2020). Female mate copying: Measuring the effect of mate-relevant information provided by former partners. *Evolutionary Psychological Science*, 6(4), 319-327. <https://doi.org/10.1007/s40806-020-00239-9>
- Sprecher, S., Sullivan, Q., & Hatfield, E. (1994). Mate selection preferences: Gender differences examined in a national sample. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66(6), 1074-1080. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.66.6.1074>
- Stanik, C., Kurzban, R., & Ellsworth, P. (2010). Rejection hurts: The effect of being dumped on subsequent mating efforts. *Evolutionary Psychology*, 8(4), 682-694.
<https://doi.org/10.1177/147470491000800410>
- Stewart-Williams, S., Butler, C. A., & Thomas, A. G. (2017). Sexual history and present attractiveness: People want a mate with a bit of a past, but not too much. *Journal of Sex Research*, 54(9), 1097-1105. <https://doi.org/10.1080/00224499.2016.1232690>
- Todd, P. M., & Miller, G. F. (1999). From pride and preju-

- dice to persuasion: Satisficing in mate search. In G. Gigerenzer, P. M. Todd, & The ABC Research Group (Eds.), *Simple heuristics that make us smart* (pp. 287-308). Oxford University Press.
- Townsend, J. M., & Wasserman, T. (1998). Sexual attractiveness: Sex differences in assessment and criteria. *Evolution and Human Behavior, 19*(3), 171-191.
[https://doi.org/10.1016/S1090-5138\(98\)00008-7](https://doi.org/10.1016/S1090-5138(98)00008-7)
- Uller, T., & Johansson, L. C. (2003). Human mate choice and the wedding ring effect: Are married men more attractive? *Human Nature, 14*(3), 267-276.
<https://doi.org/10.1007/s12110-003-1006-0>
- Vakirtzis, A. (2011). Mate choice copying and nonindependent mate choice: A critical review. *Annales Zoologici Fennici, 48*(2), 91-107. <https://doi.org/10.5735/086.048.0202>
- Vakirtzis, A., & Roberts, S. C. (2009). Mate choice copying and mate quality bias: Different processes, different species. *Behavioral Ecology, 20*(4), 908-911.
<https://doi.org/10.1093/beheco/arp073>
- Vakirtzis, A., & Roberts, S. C. (2010). Mate quality bias: Sex differences in humans. *Annales Zoologici Fennici, 47*(2), 149-157.
<https://doi.org/10.5735/086.047.0208>
- Vakirtzis, A., & Roberts, S. C. (2012). Do women really like taken men? Results from a large questionnaire study. *Journal of Social, Evolutionary and Cultural Psychology, 6*(1), 50-65. <https://doi.org/10.1037/h0099225>
- 若尾良徳・天野陽一. (2008). 20歳時点での恋愛経験人数についての意識—神奈川県の一私立大学生を対象として—. 和洋女子大学紀要人文系編, 48, 79-85.
- Walter, K. V., Conroy-Beam, D., Buss, D. M., Asao, K., Sorokowska, A., Sorokowski, P., Aavik, T., Akello, G., Alhabahba, M. M., Alm, C., Amjad, N., Anjum, A., Atama, C. S., Atamtürk Duyar, D., Ayebare, R., Batres, C., Bendixen, M., Bensafia, A., Bizumic, B., ... Zupančič, M. (2020). Sex differences in mate preferences across 45 countries: A large-scale replication. *Psychological Science, 31*(4), 408-423.
<https://doi.org/10.1177/0956797620904154>
- Waynforth, D. (2007). Mate choice copying in humans. *Human Nature, 18*(3), 264-271. <https://doi.org/10.1007/s12110-007-9004-2>
- Westneat, D. F., Walters, A., McCarthy, T. M., Hatch, M. I., & Hein, W. K. (2000). Alternative mechanisms of nonindependent mate choice. *Animal Behaviour, 59*(3), 467-476.
<https://doi.org/10.1006/anbe.1999.1341>
- Whitty, M. T., & Quigley, L.-L. (2008). Emotional and sexual infidelity offline and in cyberspace. *Journal of Marital and Family Therapy, 34*(4), 461-468.
<https://doi.org/10.1111/j.1752-0606.2008.00088.x>
- Wiederman, M. W., & Kendall, E. (1999). Evolution, sex, and jealousy: Investigation with a sample from Sweden. *Evolution and Human Behavior, 20*(2), 121-128.
[https://doi.org/10.1016/S1090-5138\(98\)00046-4](https://doi.org/10.1016/S1090-5138(98)00046-4)
- Yorzinski, J. L., & Platt, M. L. (2010). Same-sex gaze attraction influences mate-choice copying in humans. *PLoS One, 5*(2), e9115. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0009115>

Appendix

男性のプロフィール

以下に、ある男性のプロフィールがあります。あなたは、このようなタイプの男性からどのような印象を受けますか。その印象をもとに次ページ以降の質問に回答してください。あまり深く考え込まずに第一印象で回答してください。

年齢	4年制大学の3年生(20歳)
家族構成	父(46歳)・母(44歳)・弟(17歳)との4人暮らし。
容貌	それほど美男子というわけではないが、愛嬌のある顔立ちをしている。
恋愛経験	約5年間つきあった彼女と11ヵ月ほど前に別れたが、最近新しい彼女ができた。その前にも1人だけつきあったことがある。
得意な科目	数学
苦手な科目	国語
よく見るTV番組	音楽番組 スポーツ番組
よく聴く音楽のジャンル	J-POP 洋楽
趣味	フットサル 音楽鑑賞
サークル	フットサルサークル
大学での様子	興味のある授業には熱心に参加し、それ以外の授業は単位を落とさない程度に出席している。サークル活動にも力をいれており、休み時間にはサークルの友だちとつるんでいることが多い。
休日の過ごし方	休日はアルバイトをしたり、友だちや彼女と遊びに行ったりしているが、ときどきフットサルの試合で出かけることもある。予定のない日は、自宅で音楽を聴いたりして静かに過ごすこともある。